
木の上

04

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木の上

【Nコード】

N4654T

【作者名】

04

【あらすじ】

おしゃべり。と同時進行！

こんばんわー。

普段寝ている時間に目が覚める。というのは不思議な感じだ。夜は寝て、朝になったら起きる。という生活に慣れてしまったからだろう。

起きてしまったのならしょうがない。十七夜は布団から出て、夜の散歩に出ることにした。

あゝ。

玄関からでると冷気が一瞬にして体を包み、吐息は白く曇る。

（そういえば寒いんだ。部屋の中が温かいから気がつかなかった…）
十七夜は森の中に住んでいる。子供の頃に親に捨てられたので森に
来た。そこである人に恋をし、いっしょに住んでいる。外に出たの
はその人を探しに行くというのもあったが、今日は昔馴染みの来客
が来るのだ。

サクサク進んで近くの大木を見上げる。

（この辺りな気がするけどなあ…）

どん！

い…痛い！

上を見ながら歩いていたので前方の木に顎をぶつけた。顎を押さえ
ながら悶絶して木の幹を蹴り、それが弁慶の泣き所にあたり…自業
自得な結果になった。

（うゝ。いて…）涙目になりながら、足を擦ると、少し痛みが引
いた。

その時、急に辺りが明るくなり新月がその淡い輝きで陰湿な森を照
らした。（そういえば、狩りがうまくて、一生結婚しなくて、恋人

を鹿？にされちゃう女神様がいたな…名前がおもいだせないけど！）
いささか偏った覚え方だが、間違えではない。

今度は前方を確認しながら歩き出した。

何故先程、十七夜が神様という当てにならないモノを思い出したか
と言うと、来客の一人がそのイメージにピッタリだったからだ。

初めて会ったのは随分前で、同性と関わる機会がない十七夜にとって
唯一の女友達だ。放っておけば勝手に喋りだす十七夜と違ってその
人物は、用がなければ常に黙っている。そんな正反対の二人だから
こそ気があつたのか、随分と長い付き合いになる。

（あゝ。しゃべりたい！）

そう思ったとき視界に白い後ろ姿が見えた。そして反射的に声を張
り上げ、名前を呼んだ。

月の女神様のように結ばれない相手に恋してる。大切な友人の名前
を。

シイ！

こんばんわー！十七夜の声に後ろを振り向く。

（何でいるんだろう？）普通の人ならば寝ている時間だ。首を傾げ
たが、木の下で手を思いつきり振っている女の子の元へ降りていつ
た。

ストーン。シイは、軽い着地音の割には高い所から降りてきて涼しい
顔をしている。

シイ！久しぶり！元気だった？私は無駄なくらい元気だよ！なんか
また痩せたんじゃない？別にシイはそのままでも十分いけるから、
痩せる必要はないと思うんだけど、て言うかむしろ太った方がいいと

おもっ！。 あっ！太ると言えば家で飼ってるやつらがね…

とべらべらと喋りだし、街に買い物に行った話のところで、
シイが話し出した。

どうしてこの時間にいるんですか？

シイの問いに十七夜は

話の流れ的にアンタしゃべり過ぎ！てつつこんで欲しかった…。
まあいいやなんているかって言うとな、なーんか寝てたら起きちゃ
って、夜起きてることなんかないしユリとシイが来るって言ってた
からそれなら二人に会ってから二度寝しよーって思ってたさー

シイの表情はあまりかわらないが長年の付き合いで、合点がいった
と読み取れた。

ねえ、二人は？どうしてシイ一人なのよ？

十七夜の質問にシイが微妙に不機嫌になった。 そのあからさまな態度に
（こりゃ、何かやらかしたな…）

この時、何かやらかしたのがシイではなくユリだと言うことにも、
気がついていて十七夜だった。

それから二人は木に登り遠くの丘の上を見ながら話し出した。

今日来たのはシイの連れであり主人でもある、ユリのためでシイは
用が済むまで十七夜の声に後ろを振り向く。

（何でいるんだろっ？）普通の人ならば寝ている時間だ。 首を傾げ
たが、木の下で手を思いつきり振っている女の子の元へ降りていっ
た。

ストーン。 シイは、軽い着地音の割には高い所から降りてきて涼しい

顔をしている。

シィー！久しぶり！元気だった？私は無駄なくらい元気だよ！なんかまた痩せたんだじゃない？別にシィはそのままでも十分いけるから痩せる必要はないと思うんだけど、て言うかむしろ太った方がいいとおもう！。あつ！太ると言えば家で飼ってるやつらがね…

とべらべらと喋りだし、街に買い物に行った話のところで、シィが話し出した。

どうしてこの時間にいるんですか？

シィの問いに十七夜は

話の流れ的にアンタしゃべり過ぎ！てつつこんで欲しかった…。まあいいやなんているかって言うよね、なーんか寝てたら起きちゃって、夜起きることなんかないしユリとシィが来るって言ってたからそれなら二人に会ってから二度寝しよーって思ってたさー

シィの表情はあまりかわらないが長年の付き合いで、合点がいったと読み取れた。

ねえ、二人は？どうしてシィ一人なのよ？

十七夜の質問にシィが微妙に不機嫌になった。そのあからさまな態度に（こりゃ、何かやらかしたな…）

この時、何かやらかしたのがシィではなくユリだと言うことにも、気がついてる十七夜だった。

それから二人は木に登り遠くの丘の上を見ながら話し出した。

今日来たのはシィの連れであり主人でもある、ユリのためにシィは用が済むまで会話は聞こえなくても、姿が見える場所で待機という感じらしい。ちなみに十七夜はここから人影もなにも全く見えない。

ねえ、なんかあったの？

十七夜が聞くとシイは横目でチラリと見た。十七夜が首を傾げるとしゃべりだした

理由はわからないんですけどユリが三日間家出しまして。

えっ！

思わず十七夜は驚きを隠せない。

（うわあゝ。逃げたんだあいつ…）

十七夜はユリが家出した理由が瞬時に想像できたので呆れた。

それで心配してて色々あつてここに来たっておしゃるので連れてきたのです。

へエ。大変だったんだね。シイ泣いた？

シイは驚いて、十七夜をまじまじと見た。

なんでわかるんですか？

…

（わからない方が変でしょうが！）と十七夜は思った。

なんで涙なんか出たんでしょう…

独り言のように呟いたシイの横顔を見ながら十七夜は思った。

答えはひとつしかないよと

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4654t/>

木の上

2011年10月8日23時28分発行